

第4代院長 C. J. L. ベーツ ——『ベーツ日記』より

関西学院宣教師・関西学院大学社会学部准教授

Timothy O. Benedict



ベーツの自己評価

第4代院長 C. J. L. ベーツが1920年から1940年まで関西学院を導いた時代は、原田の森から西宮上ヶ原キャンパスへの移転、関学生が愛する「Mastery for Service」のモットーの提唱など、今日の学院の礎を築いた大事な時期であった。しかし、彼自身がどう自分の働きを捉えていたのか、彼の日記からは意外な一面が浮かび上がってくる。ベーツは1936年5月26日、59歳の誕生日に次のように日記で振り返っている。「教育者や大学の運営に携わる者としては、それなりの成果をあげてきたかもしれない。けれども、人の魂をキリストへと導く者として、人を釣る漁師として、あるいは人の人生を変える者としては、自分は失敗してきたのだとを感じるようになった」。このように学院史に名を残し尊敬されてきたリーダーが、日記では自らの宣教活動については極めて厳しい自己評価をしていた。

「ベーツ日記」について

この日記は、背広の内ポケットに収まるほどの小さなノートに、ベーツの力強い筆跡でぎっしりと書き込まれている。表紙には Guidance Book & Diary とあり、その内容は主に信仰生活についてである。「Guidance（導き）」は、当時ベーツが熱心に参加していたキリスト教運動 Oxford Group Movement の特別な用語であり、毎日の黙想や祈り、いわゆる Quiet Time を通して神の導きに耳を傾けることを意味していた。この「導き」が日記の中心テーマであり、そこには家族の健康、日本における宣教活動、そして差し迫る戦争への不安についての思いや祈りなどが記されている。日記は1935年から1942年まで、院長として務めた最後の5年間とカナダに帰国した後の2年間を含んでいる。日記を始めた前年の1934年にはベーツ自身が静脈炎と血栓症により半年間療養を余儀なくされ、同年妻ハッティも脳溢血で言葉を失い、半身不随となっていた。それ以前から日記を書いていたのかは定かではないが、1935年から始まっていることを考えると、困難を経た直後から新しい習慣として書き始めた可能性は高い。

ベーツの素顔

日記にはベーツの性格や信仰上の葛藤、自らの失敗や弱さを包み隠さず記している。例えばお金の管理が苦手だったベーツは次のように反省している。「神よ、金銭面での

不注意、宣教団体の会計担当者に心配をかけたこと、そして私が招いた赤字をどうかお赦してください。より良く努められるようお助けください……しかし私は誰をも騙したことはありません。宣教団体や学校を欺いたことはありません。ただ帳簿の管理が面倒に感じられただけです」(1935.10.3)。ここからは、ベーツの誠実さと自己認識の深さがうかがえる。また、宣教への強い熱意を持っていたベーツは、その熱意に周囲がついて来られない時もあったようだ。「私はあまりに熱心すぎて、かえって人々の反感を買ってしまうのかもしれない。自分の子どもたちに私の訴えや生き方がほとんど受け入れられないのはなぜなのか理解できない。二次的なことに妥協しなすぎるのだろうか。あまりに強く迫りすぎ、無理に歩調を早めさせているのだろうか」。ここで彼の真面目な性格がよくわかる。特に彼が広めようとしていた Oxford Group Movement について学院の同僚からも支持を得られなかった時もあった。「なぜ私は、共に生活し働いている教員たちから全く支持を得られないのだろうか。昨日ベイジル・エントウィッスルが、『あなたが進めている運動に共に加わっている教員は何人いますか』と尋ねたが、私は『一人もいない』と答えざるを得なかった」(1936.8.22)。このように日記の行間からは、孤独感も度々漂ってくる。

最後まで諦めないベーツ

1930年代後半はベーツにとって熟年期の「黄金期」であるはずだった。しかし、健康問題や、戦争の影が関西学院と日本を覆いはじめるなかで、ベーツの悩みは尽きなかった。それでもなお、印象的なのは、ベーツが決して諦めず、自らの葛藤を神に従う決意へと変えていった姿である。ここに関西学院をリードしたベーツの強さが見える。困難のただ中で、彼は神の導きに耳を傾け続け、自分の進むべき道を常に見出そうとしていた。1940年5月26日にベーツは戦争の影響で余儀なく辞任をするが、翌週の1940年6月4日の日記の冒頭にこう呟いている。「人格とは、人生を貫く一つの目的を成し遂げることによって、全体として一つに形づくられるものである。」"Character is the unification of the personality through the achievement of a dominant purpose." ベーツ院長の日記を読み通す限り、関学への熱い愛は彼の生涯を貫く一つの目的であり、まさに彼の人格を統一し、形づくっていたものであった。

(ベネディクト ティモシー)